

# ペラギウス論争への相互影響・発達史的研究方法の適用妥当性 ——ドナトゥス派論争との関係考察における史的・方法論的課題を中心に——

## Validity of a New Mutually Influencing, Historically Developing Theological Approach: Historical-Methodological Arguments Exploring the Relationship with the Donatist Controversy

山 田 望

Nozomu YAMADA

### Abstract

Gadamer created the foundation of the socio-philosophical Hermeneutic Method utilizing the model of the “Dialog”. Habermas criticized Gadamer’s methodology, which ignored “systematically distorted communication”. Based on this criticism, Habermas proposed his ideology-critical hermeneutic, later inherited by the German church historian Grillmeier. He clarified three rhetorical devices used in the excommunication of Nestorius: 1) systematization, 2) schematization, and 3) rhetorical dialectic. Although initially successful, no longer can Grillmeier’s three devices nor Gadamer’s nor Habermas’s methodologies be validly or effectively applied to investigating the relationship between the Donatists’ and Pelagian Controversies. In both of these controversies, no “Dialog” or “systematically distorted communication” but their exact opposite, even destructive violence by sectarian and governmental powers were executed. To address the positivist problems of Gadamer’s and Habermas’s methodologies, I would like to propose a new approach, which could be applied to conflicting plural Christian parties, based upon a mutually influencing, historically developing theological basis, itself grounded in “dependence behind violence”. This article explores applying this new approach to deepening our understanding of the relationship between the Donatists’ and Pelagian Controversies.

### 目次

#### 序論

#### 第Ⅰ章 問題提起

##### 第1節 研究の経緯と背景

##### 第2節 相互影響・発達史的研究方法導入の経緯

#### 第Ⅱ章 解釈学的方法論の発達と問題点

##### 第1節 解釈学的方法論の発達と展開

	第1項	影響史的（作用効果史的）研究方法
	第2項	イデオロギー批判的方法論の導入
	第3項	異端排斥における修辭的戰略技法の3類型
第2節		解釈学的・イデオロギー批判的方法論の問題点
第3節		相互影響・発達史的研究方法とは
第Ⅲ章		ドナトゥス派論争とペラギウス論争間の相互影響・相互依存関係
	第1節	アウグスティヌスによる両派に共通する問題性の認識
	第2節	ペラギウス派による厳格派への批判的見解
	第3節	ドナトゥス派説教集における聖書解釈とペラギウス派批判
	第4節	相互影響・発達史的研究方法適用の妥当性とその前提状況
		結論
		文献目録

## 序論

本稿筆者は、西洋思想史において西方教会最大の異端思想として知られるペラギウス派の神学思想について、この思想は、東方神学のアンティオケイア伝承と密接な繋がりを有し、すなわち、東方神学の正統的系譜と同等の思想内容を保持し、いわゆる異端思想などとは無縁であったとの仮説を従来から主張してきた<sup>1)</sup>。

本稿筆者が手掛けてきたペラギウス研究の最終的目標のさらにもう一つは、上に挙げた東方神学的観点からすれば異端などではなかったとする仮説と表裏一体の関係にあるが、それではなぜペラギウス派はアウグスティヌスを始めとする北アフリカ陣営により異端として激しく糾弾され、西方教会において排斥されるに至ったのか、またこれに加えて、ペラギウス派神学が東方神学内の異なる伝承からの影響を多数併存させているのはなぜかとの重要課題について、相互影響・発達史的方法論を新たに導入することにより、実証的に解明することである。したがって、本稿の第一の課題は、新たに導入される相互影響・発達史的方法論とは如何なる特徴を有するものであり、従来の解釈学的方法論とはどのように異なり、その弱点を克服すべく如何にして開発・導入されたものであるのかについて明らかにすることである。

さらに、本稿筆者が手掛けてきた研究全体は、ペラギウス派や東方側ヨアンネス・クリュソストモスらのパトロン貴族たちが行っていた救貧・慈善活動における西方と東方の連携性・類似性、また、アウグスティヌス陣営が時を違えて激しく対立したドナトゥス派とペラギウス派との繋がりを示す痕跡史料を、伝承史的・文献学的史料のみならず、考古学的、美学美術史的史料データからも推察・再構成することで、より立体的・総合的にペラギウス派神学思想の位置づけと排斥のメカニズムを解明するという学際的総合研究を旨としている。

以上の大前提となる大きな研究目標のもと、本稿の第二の目的は、従来、ほとんど別個の論争としてのみ扱われてきたドナトゥス派論争とペラギウス論争との間にはそもそも何らかの関係が存在

1) 主な拙論文献については、本稿末尾の文献目録を参照。中でも、博士論文を元に出版された次の文献は、本邦における唯一のペラギウス研究に関する単著である。山田望、『キリストの模範—ペラギウス神学における神の義とバイディア—』（教文館、1997年）。

したのか、存在したとすればそれはいかなる諸関係であったのかという課題について、幾つかの重要な史料を検証すると共に、相互影響・発達史的方法論適用の妥当性を確かめることである。

## 第 I 章 問題提起

### 第 1 節 研究の経緯と背景

本稿筆者は、これまで 30 年に亘りペラギウス派の研究を手がけてきており、一連の研究によって、ペラギウス派神学思想は西方では最大の異端思想として排斥されたが、東方神学の諸伝承からすれば全く異端思想などではなく、東方神学の基本的特徴を西方で繰り返していたに過ぎないことをさまざまな角度から論証する研究を行ってきた。そのための有力な証拠を複数発見すると共に、それらの発見によるペラギウス派排斥にまつわる新たな論証を海外の諸学会で発表して高い評価を得てきた。その間、ペラギウス研究に関連して 3 度、科学研究費を獲得し、4 年に一度、英国 Oxford 大学で開催される International Patristic Conference（国際教父学会）においてこれまで複数回に亘ってその成果を発表し、国際的学術誌 *Studia Patristica* に直近 3 回の発表内容が掲載された<sup>2)</sup>。また、2013 年以降 5 年に亘り、継続的に国際学会 Asia Pacific Early Christian Studies Society (APECSS) で発表し、その成果は、世界的に知られる Brill 社が刊行する学術誌 *Scrinium* に 3 度に亘って掲載された<sup>3)</sup>。以上の実績により、ペラギウス派神学思想は、本来、異端思想などではなかったとの拙論の有効性が国際的にも次第に認知されつつあることは明らかであり、更なる研究により、この仮説が完全に証明された暁には、西洋思想史上のペラギウス派の位置づけに関して、世界的にも注目し得る画期的な研究成果となることは間違いないであろう。

しかしながら、ペラギウス派の神学思想が、東方神学の観点から見れば異端思想などではないという事実が明らかとなるに伴って、それではなぜ彼らの神学思想が西方側で異端視され排斥されたのか大きな問題となる。さらに、東方神学の伝承といってもペラギウス派はどの伝承を継承していたのか、ペラギウス派の神学思想には東方の異なる複数の伝承の特徴が窺えるが、なぜアンティオケイア伝承の基本的特徴のみならず、それとは異なる東方伝承の特徴をも備えるに至ったのか、という問いも大きな問題となる。具体的には、ペラギウス派の神学思想は、基本的にアンティオケ

- 
- 2) Nozomu Yamada, “The Influence of Chromatius and Rufinus of Aquileia on Pelagius - as seen in his Key Ascetic Concepts: exemplum Christi, sapientia and imperturbabilitas”, *Studia Patristica*, Vol. 70, Peeters Publishers, 2013, pp. 661-670.; Nozomu Yamada, “Pelagius’ Narrative Techniques, their Rhetorical Influences and Negative Responses from Opponents Concerning the Acts of the Synod of Diospolis”, *Studia Patristica*, Vol. 98, Peeters Publishers, 2017, pp. 451-462; Nozomu Yamada, “Pelagians’, Chrysostom’s and Augustine’s Different Views on Pain of Childbirth as Revealed through their Counsel to Women”, *Studia Patristica*, Vol. 128, Peeters Publishers, 2021, pp. 295-307.
- 3) Nozomu Yamada, “What Is the Evil to Be Overcome? Differences between Augustine’s and Pelagius’ Views on Christ’s Life and Death”, *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, Vol. 11, Brill, 2015, pp. 160-180; Nozomu Yamada, “Rhetorical, Political, and Ecclesiastical Perspectives of Augustine’s and Julian of Eclanum’s Theological Response in the Pelagian Controversy”, *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, Vol. 14, Brill, 2018, pp. 161-193; Nozomu Yamada, “Pelagius’ View of Ideal Christian Women in his Letters - Critical Perspectives of Recent Pelagian Studies Comparing Chrysostom’s View in his Letter to Olympias”, *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, Vol. 16, Brill, 2020, pp. 67-88.

イア伝承に酷似した神学思想を有しながらも、アレキサンドリア伝承に属するオリゲネスからの影響やカッパドキア3教父の中でもバシレイオスからの影響も確認できる<sup>4)</sup>。このように、東方アンティオケイア伝承の特徴を基本的に備えながらも、それ以外の伝承からの影響も窺えるなど、複雑に入り組んだペラギウス派の神学思想の構造を如何に整理し、どのように統括的に把握すべきかが極めて重要な課題と見なされてきたのである。

## 第2節 相互影響・発達史的研究方法論導入の経緯

以上の、1)ペラギウス派神学思想が東方神学の観点からは異端思想ではないとすれば、なぜ西方側、とりわけアウグスティヌス陣営からあれほど激しく糾弾、排斥される事態に至ったのか、2)東方神学の中でも、アンティオケイア伝承を基本思想に据えながらも、異なる神学伝承からの影響が確認されるのはなぜかといった重要課題に対し、本稿の大枠となる研究全体としては、ペラギウス派の神学思想を、伝承史的、教会政治史的検証により解明される基本成果を根幹に据えつつも、その神学思想全体については、相互影響・発達史的方法論の導入により、その都度新たな思想要素を取り込みながら展開されていった動的な思想史の流れとして解明することを目的としている。

つまり、本稿が位置づけられる研究全体が目指す最終的学術目標に至る具体的作業手順としては、まず、文献学的・伝承史的に思想内容そのものの分析・検証を行い（特にモプスエスティアのテオドロスやヨアンネス・クリュソストモスとの思想的連携）、続いて、ペラギウスやその弟子のカエレスティウス、ユリアヌスらが、アンティオケイア伝承の思想家たちとどのような実質上の繋がりがあったのか、また、如何なる歴史的経緯や政治的圧力により排斥にまで追い込まれる結果となったのか、教会政治史的考察が不可欠となる<sup>5)</sup>。さらに、相互影響・発達史的観点から、時系列的に連続する異なる複数の論争を経ることにより、ペラギウス派神学思想がいかなる展開・発達・先鋭化を来していったかを解明することが求められる。

すなわち、ペラギウス派は、アウグスティヌス陣営とのいわゆるペラギウス論争だけに関わっていたわけではなく、時系列的に連続するオリゲネス主義論争、ドナトゥス派論争、そして、ペラギウスの弟子たちがネストリオス派の下に逃れたとの事実からも、ネストリオス派論争にまでも関与していたことが、相互影響・発達史的には重要な意味を有するのである。

総括すれば、オリゲネス主義論争（東方側）、ドナトゥス派論争（西方側）、ペラギウス論争（西方側）、ネストリオス派論争（東方側）というペラギウス派関わった連続する、かつ東西の度重なる論争を経る毎に、ペラギウス派の神学思想は、その都度の論敵勢力との相互影響を被ることによって、本来の伝承とは異なる伝承からの影響をも獲得し、より独自の先鋭化されたものへと思想的発達を来したのではないかと推察される。その思想的発達による先鋭化の過程で、西方側ではアウグスティヌス陣営からの激しい抵抗や反発を引き起こし、同時に、アウグスティヌスの神学も同様に思想的発達・先鋭化を来す結果をもたらしただのではないかと推察される。しかしながら最

4) バシレイオスからの影響については、Nozomu Yamada, "The Influence of Chromatius and Rufinus of Aquileia on Pelagius - as seen in his Key Ascetic Concepts: exemplum Christi, sapientia and imperturbabilitas", *Studia Patristica*, VOL. LXX, PEETERS, 2013/8, pp. 661-670.

5) ローマ市においてペラギウス派が排斥された理由や教会論的状况については、既に次の論文において素描を発表している。山田望, 「東方型修道制のローマ市移植における挫折要因」, 『キリスト教修道制一周縁性と社会性の狭間で』, Sophia University Press, 2003/03, pp. 71-108.

最終的にペラギウス派は、教会政治的対抗勢力、とりわけアウグスティヌスやアレキサンドリアのキュリロスら、北アフリカ伝承の担い手によって、アンティオケイア伝承の中でも東方側異端として排斥されたネストリオス派と同類であると一方的に決めつけられたことにより、不当にも排斥されてしまった可能性がきわめて濃厚である。

以上のように、本稿の問題提起の土台を構成する筆者の研究全体の学術的独自性は、単にペラギウス派神学思想を、特定の既存神学思想の枠内にもみ位置づけるという従来の静的分析・分類に留まらず、それだけでは把握しきれない神学的要素の解明について、ペラギウス論争の前後に生じた、相次ぐ論争を経ることによる相互影響・発達史的方法論を導入して検証・分析しようとする点にある。

既に本稿筆者はこれまでの研究テーマとして、ペラギウス論争に先立つオリゲネス論争とペラギウス派との関連を扱い、従来、全く異なる論争だと思われていたこれら二つの論争は、二世代に及ぶほとんど同じ人脈・陣営間の論争であったことを突き止め、論争のテーマこそ異なるものの、両論争間には異なる人間観を巡る共通した思想史的リンケージが存在していたことを解明した<sup>6)</sup>。まさに、ペラギウス派神学思想に、アンティオケイア伝承からの影響のみならず、オリゲネスというアレキサンドリア伝承を代表する神学思想家からの影響や、カッパドキア三教父の一人バシレイオスからの影響も伺えるのは、ペラギウス派が、先立つオリゲネス主義論争にも関与していたことによる相互影響・発達史的観点から解明できるものと期待される。

さらに、アウグスティヌスに代表される北アフリカ陣営は、ペラギウス論争に先立って、ドナトゥス派との間で激しい対立抗争を展開させ、帝国当局からの武力行使をも要請する形でドナトゥス派を弾圧・排斥した<sup>7)</sup>。ところが、ドナトゥス派の排斥が決定づけられたまさに同年の411年にペラギウス論争が開始されたにも拘らず、これら二つの論争は神学的主要論点が異なるとして、完全に別個の論争として扱われるのが常であった<sup>8)</sup>。北アフリカ陣営は、ペラギウス派の思想活動に対してドナトゥス派に対するのと同様に激しく反発・抵抗を続け、俗権の介入まで要請して彼らを排斥にまで追い込んだ<sup>9)</sup>。

管見では、今回の相互影響・発達史的方法論を導入するならば、これら前後する二つの論争とドナトゥス派ならびにペラギウス派の相次ぐ排斥には、神学的論点自体こそ異なるものの、両者の排斥間に何らかの相互影響・発達史的要因が存在したのではないかと推察している。すなわち、ドナトゥス派の弾圧・排斥の直後にペラギウス派が立ち現れたことで、アウグスティヌス陣営は、またもやドナトゥス派と同様の過激な異端が現れたとの誤解・曲解を生じた可能性が推察される。事実、自

6) 山田望, 「ペラギウス派排斥のメカニズム—神学的言語行為の政治性」, 『キリスト教史学』53号, (1999年) pp. 103-122.

7) Augustinus, *Epistola.*, 93=NBA, 21, *Le Lettere* I (1-123), Roma, 1969, pp. 806-877; 408年にヴィンケンティウスに宛てて書かれた書簡で、ドナトゥス派の問題における世俗の権力行使を肯定的に論じている。

8) 宮谷宣史, 『人類の知的遺産—アウグスティヌス』(講談社, 1981年) pp. 181-220, は、ドナトゥス派論争とペラギウス論争との関連性については全く触れていない。他方, 出村和彦, 『アウグスティヌス—「心」の哲学者』(岩波書店, 2017年) pp. 103-137, は、学術的アプローチというよりも随筆的語りではあるが、アウグスティヌスを含むアフリカのカトリック司教たちがペラギウス派の教会観に「ドナティストの教会観に通ずるものを見て到底受けられなかった」, と指摘している。学術的・文献学的に両派の神学的・教会論的共通性を論じた研究は、後述のAlden Bassのもの以外ほとんどない。

9) Augustinus, *Opus Imperfectum*, 3, 35=CSEL 85/I, 374-375, では、エクラスムのユリアヌスが、アウグスティヌスは、なぜ賄賂まで渡してペラギウス派排斥に俗権の介入を要請したのか, と詰問している。



由意志の強調や自覚的信仰者集団として教会を特徴づける点で、ドナトゥス派の神学思想とペラギウス派の神学思想には、決定的相違のみならず相当似通った共通する要素が確認できるからである。

しかしながら、ドナトゥス派とペラギウス派の思想史的・影響史的な関連性・類似性を本格的に取り上げた研究は皆無に等しい<sup>10)</sup>。今回、両派の類似性さらには関係性をも解明することによって、アウグスティヌス陣営のペラギウス派に対する激しい対立抗争の本質的理由を明らかにできる可能性が期待される点、さらには、ペラギウス派が関与した複数の異なる論争全体を俯瞰的・統合的に捉えながら、ペラギウス派神学思想を動的な思想形成・展開の一連の流れによる所産と見なすべく、相互影響・発達史的観点を導入した点が、きわめて創造的な発想によって可能となった本研究独自の特徴と見なすことができよう。

## 第二章 解釈学的方法論の発達と問題点

今回、従来の研究方法とは異なる新たな方法論を導入するにあたり、その新たな方法論がいかなる経緯で考案・開発されるに至ったのかについて押さえておくために、本章では歴史研究における方法論史を短く辿る形で教理史・教会史研究の方法論を巡る課題について論点を明確にしておきたい。要点を絞り込んで本稿のテーマに即した内容のみに焦点を合わせるために、おもに社会科学分野で議論されてきた解釈学的方法論の確立・発展とその限界の指摘から説き起こすこととする。

### 第1節 解釈学的方法論の発達と展開

#### 第1項 影響史的（作用効果史的）研究方法

歴史の認識主体が同時に歴史を構成する一員として歴史的制約の内に生きているという歴史認識の構造を解明しつつ、解釈学的循環と解釈学的自己反省とが歴史学にとって不可避であるということを主張したのがH. G. ガーダマーであった。その主要著書『真理と方法』の改訂版序論の中で、彼は、歴史認識上の客観性と主観性の相関関係について「影響史（作用効果史：Wirkungsgeschichte）」というキーワードを用いて説明しようとする<sup>11)</sup>。すなわち、ある特定の歴史的事象は、その周辺やその後の歴史事情にさまざまな影響を及ぼしつつ働きかけ、周囲や後世の人々はその影響の下に制約を受けつつ新たな歴史的事象の生起に参与する。この時、最初の歴史的事象とその影響下にある人々との間には歴史認識に際しての「地平」(Horizont) が形成される。この地平とは、歴史認識の主体である者が自分とは完全に異なった超越的存在として客体化できるものではなく、またさりとて認識主体がその地平の中に心理的に自己を移して完全に埋没してしまうというものでもない。歴史の解釈者は、いつも既にその地平の内部に生きつつ、その地平に立脚し、そのこと自体を意識しながら歴史的事象を理解すると同時に、自らも歴史的主体としての営み

10) 2022年に公開されたドナトゥス派研究に関する全ての研究文献をリスト化したデータベースにおいても、ペラギウス論争とドナトゥス派論争との関係に関わる本格的な研究は本校の第2章で取り上げるAlden Bassの論文1点を除いた他は皆無である。データベースについては、Paola Marone, *Donatism, Online Dynamic Bibliography, Update 2022*, Sapienza Università di Roma, 2022.

11) H. G. Gadamer, *Wahrheit und Methode; Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, (Tübingen, Mohr Siebeck, 1965). = ガダマー, ハンス=ゲオルク, 豊田収 / 三浦國泰 / 巻田悦郎訳, 『真理と方法 (1) — 哲学的解釈学の要綱 (第2版)』, 叢書・ユニベルシタス, (法政大学出版局, 2012/11).

を継続していく形で新たな地平の形成に参加する。ガダマーは研究者の歴史認識と自己意識との独特な関係性に関する以上の事象について、次のように纏めている。

「われわれの歴史的意識が、自己を歴史的地平の中に移し置くとしても、それは、決して、われわれ自身の世界とは全く無縁で疎遠な世界の中へ自己を没入させてしまうことを意味するものではない。それはむしろ、それらの諸地平が共に、内部から動いている一つの地平を形成することを意味する。それはわれわれの自己意識の歴史的深遠を含意する地平である。要するに、それは歴史的意識が、自己の中に含んでいる一切のものを包括する唯一の地平である。われわれの歴史的意識が向けられている、自己の過去及び他者の過去は、共にこの動いている地平を形成する。そしてその地平の中から人間の生の営みは生かされているのであり、その地平こそが人間の生の営みを由来及び伝承として規定しているのである<sup>12)</sup>。」

歴史を認識しようとする主体は、歴史が働きかける影響（作用効果）を受けそれに規定されつつ歴史を認識しようとする。こうして認識された歴史と認識した主体の行為が新たな影響を行使する新たな歴史を形作る。この一連の循環現象の結節点に主体の認識行為とその主体を内包しつつしかもその主体に影響を及ぼす「地平」が形作られていく。この地平は、過去から現在、そして未来へとその都度の認識者（解釈者）に応じて新たに捉え直され、連鎖的に影響を行使する形で継承されていく。その過程でガダマーは「地平融合（Die Horizontverschmelzung）」が生じていると指摘する<sup>13)</sup>。そこで指摘されているのは、合異なる独立した地平同士のぶつかり合いではなく、地平自体はいつも既に唯一つである。この一つの地平を媒介に解釈者は歴史事象と対峙し、且つ又、歴史事象からの影響を受ける。

いわば過去から現在に至る歴史が影響を行使する地平と、その地平に規定されつつ未来に向かって新たに過去を解釈し直そうとする認識主体の地平との「融合」である。したがって、19世紀歴史学の主流であったL. von ランケらが主張した実証主義歴史学のような純粹客観的な歴史認識はもはや成り立ち得ない<sup>14)</sup>。解釈者がいかに過去の歴史そのものを実証的、客観的な分析を行おうと立ち向かったところで、「解釈された意味の連関としての歴史の地平」に触れることはできても、歴史「そのもの」に触れることはもはや不可能である。あくまでも解釈された過去（地平）でしかなく、しかしその解釈された過去は解釈者自らの主体に影響を行使し続ける過去（地平）でもある。

ガダマーが解釈学の導入により確立した歴史認識の構造は、「対話」のモデルによっても説明されている<sup>15)</sup>。歴史認識とは、方法としていかに実証的客観的分析考察を導入しようとも、すぐれて過去の地平との「対話」であって、その点が実験観察の主体と客体とが完全に分離された自然科学的実証主義とは決定的に異なる点である。対話しようとする際、人はまず相手の言わんとすること、相手からの自分に対する呼びかけを傾聴しそれを理解しようとして自己を開示しなければならない。同時に相手に対して相手を理解しようと呼びかけつつ、自らをも理解されるべく提示する。さらに対

12) H. G. Gadamer, *ibid.*, XIX-XX.

13) *Ibid.*, XX.

14) Leopold von Ranke, *Zur Kritik neuerer Geschichtschreiber*, Leopold von rankes Sammtliche Werke, Bd 33-34, (Duncker und Humboldt Leipzig, 1874); H. G. Gadamer, *ibid.*, pp. 185-198.

15) *Ibid.*, pp. 361-465.

話が成立するためには、自分を相手の立場に転置して彼の主張するところを自らのものとして受容する。そうしてはじめて異質な他者の内在化が起こりその理解を獲得することが可能となる。しかしその理解は決して一定不変ではあり得ず、対象との対話の深まりや新たな情報の提起によりその理解は常に変化と修正を必要とする。歴史事象と認識主体との関係も、観る者と観られる者といった主客の関係ではなく、歴史事象が現す地平からの呼びかけに応答しつつ、それに呼応してさらに自らその地平に呼びかけるといふ、いわば双方向の関係であり、同時に両者は相互に包含関係にある。

かくして、歴史を探求しようとする者に要求されるのは、常に自ら描き出した歴史像を批判的に修正し事態に即して変更を加えることが可能であり、その準備ができていという開かれた姿勢である。同時にそれは、自分の理解・解釈が常に正しく絶対であるとは限らないという自己批判的、自己懐疑的姿勢でもある。その姿勢を堅持しつつ、解釈によって生起する意味連関（地平）を意識しつつ、なおかつ自らの内に涵養された倫理的価値観からの誘惑に抗しながら、あくまでも歴史的事象には「禁欲的に」実証的論理的姿勢を徹底させてはじめて、歴史認識における「客観性」を保持することが可能となる。

## 第2項 イデオロギー批判的方法論の導入

歴史認識の方法論を、解釈学的反省構造を導入することによって新たに提起し解釈学的歴史認識の可能性を開いたのがガダマーの功績であった。これを高く評価しつつも、同様に「対話」のモデルを採用しながら、言語、労働、相互行為（コミュニケーション：対話）という三つの観点から、さらに残るガダマー理論の問題点を指摘し修正を図ろうと試みたのがハーバーマスである<sup>16)</sup>。ハーバーマスは『社会科学の論理のために』という書物の中で、ガダマーの歴史認識のモデルを採用しつつも、現代に特徴的な「組織的に歪曲された言語コミュニケーション」の存在をガダマー理論は見落としていると指摘する。歴史認識に限らず、学問研究、問題発見と解決、政策立案といった知的作業のほとんどが言語を媒介とした対話（コミュニケーション）に頼っている。しかしその言語は、マスコミ報道やさざまな情報操作、さらには特定領域における専門的な言語体系の使用などによって、いつの間にか大衆をはじめ研究者や政策立案者をも組織的に操作しかねない道具と化すリスクを常に孕んでいる。自明で顕在化したイデオロギーに対して批判的であることは容易でも、潜在的に気づかれない内に認識を操作するように働く隠されたイデオロギーに対しては、それを意識的に顕在化させようとしない限り、知らず知らずの内にそのイデオロギーに身を委ねてしまう結果をもたらす。この問題点をハーバーマスは「認識に先立つ利害・関心」という視点から浮き彫りにしたのである。

「言語は支配の、また社会的力関係の媒体でもある。それは、組織化された力関係の合法化に奉仕する。言語はこの力関係とその関係の設立を可能にし、それによって合法化が成立するが、この合法化が力関係を言い表そうとしない限り（隠蔽してしまう限り）、また、力関係が合法化においてのみしか表現されない限り、その（媒体としての）言語もまたイデオロギーの担い手となる。その場合、ある特定の言葉による歪曲ではなく、その言語全体による欺きが問題となる<sup>17)</sup>。」（邦語訳も括弧内の補筆

16) Ed. by J. Habermas, D. Heinrich, J. Taubes, *Hermeneutik und Ideologiekritik*, (Frankfurt, 1975), pp. 120-159.

17) J. Habermas, *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1970), p. 287: "Sprache dient der Legitimation von Beziehungen organisierter Gewalt. Soweit die Legitimation das Gewaltverhältnis, dessen Institutionalisierung sie ermöglichen, nicht aussprechen, soweit dies in den Legitimationen sich nur ausdrückt, ist Sprache auch ideologisch."



も本稿筆者による)

言語が無意識的にであれ意識的にであれ、「組織的に歪曲された言語コミュニケーション」の実態を描き出そうとせず、その歪曲に対して黙し続ける限り、その言語自体が特定のイデオロギーに奉仕するものになってしまう。マスメディアや政治における情報操作やフェイクニュースが深刻な問題を抱えることとなった昨今ではなおさらのこと、ハーバーマスの警鐘は傾聴に値する。イデオロギーに奉仕する言語をもってしては、「客観的な」かつ健全な歴史認識は不可能となる。すなわち我々には、歴史認識に際して先に指摘したように常に自己批判的に自らの解釈を修正する開かれた姿勢を持ちつつも、同時に「組織的に歪曲された言語コミュニケーション」に対して常に警戒し、それを自らの言語によって喝破できるほどの批判的主体を確立しておかなければならない。そのためにも、自己の歴史的価値判断に基づいて歴史事象を客観的に検証できるほどの知識と実証的論理構成能力を養うばかりでなく、その歴史的価値判断を支える自らの倫理的価値判断の力を常日頃から十二分に涵養し作り上げておくことが不可欠であろう。もちろん、誤りであることが明らかとなれば自ら進んで自己の判断や理解を修正することが可能な修正可能性、自己開示性を保ちながらのことである。

ハーバーマスによるイデオロギー批判的研究方法の導入は、ガーダマーが提起した「対話」のモデルに基づく学問的客観性確保の方法論的努力を高く評価しながらも、そのような建設的な「対話」に上ってこない事象や、密かに人々の印象や思考に影響を与えようとする隠されたイデオロギー操作の事態に対しても有効な方法論を示したという点で画期的な学問的突破口を示したとあって良い。おもに社会科学分野における新たな方法論の構築にガーダマー理論やハーバーマス理論が大きく貢献してきたことは、もはや周知の事実になりつつある。

ところで、こうした社会科学の牽引役となってきたガーダマーによる解釈学的（作用効果史的）研究方法の開発、ハーバーマスのイデオロギー批判的方法論の導入に刺激されながら、こうした社会科学の方法論的成果を、キリスト教教理史における異端の排斥事例、とりわけネストリオス派の排斥に対して採用し、教会教理史における新たな「地平」の確立に寄与したのが、A. グリルマイヤーである。

### 第3項 異端排斥における修辭的戰略技法の3類型

グリルマイヤーは、解釈学的・イデオロギー批判的方法論からの決定的影響の下、5世紀の東方教会における最大の異端排斥の事例となったネストリオス派の排斥に関して、排斥する側が行使した修辭的戰略技法を次のような3つの類型にまとめ上げている。すなわち、1) 組織化、2) 図式化、3) 修辭的弁証法である<sup>18)</sup>。

グリルマイヤーの類型に従えば、第1の修辭的戰略技法である「組織化」とは、論敵の主張内容の全体ではなく一部の不明瞭な言説や弱点となりうる言説だけを取り上げて、あたかもこの一部分の不明瞭さや弱点が他のほとんど全ての部分についても同様に不明瞭であり不適切な弱点として妥当するかのように、いわば組織的に一部を全体へと誇張して異端の見解であると決めつける手法である。

18) A. Grillmeier, *Mit ihm und in ihm. Christologische Forschungen und Perspektiven*, (Freiburg, Basel, Vienna, Herder, 1975), pp. 219-242, 554-581.

第2の「図式化」とは、論敵の主張の際立った特徴が、すでに排斥された過去の異端者の最悪の言説内容と質的に全く同じ特徴であると一方的に決めつける修辭的技法である。あるいは全く逆に、論敵に対峙している自分の主張の際立った特徴は、過去に存在した何らかの正統的権威者の主張内容の特徴と実質的に同じであると見なす修辭的技法であり、実際には過去の権威者の主張とは似て非なる別ものであるにも拘らず、そのような決めつけを一方的に行うことで自らの言説の特徴があたかも「正統」で権威あるものであるかのように印象づけようとする戦略類型である。

最後の「修辭的弁証法」とは、論敵の言説を、全く異なる他の論敵の言説や主張内容と対峙・比較し、内容や文脈は異なっても論旨や特徴が他の異端者の言説と結局は同等のものであるとして両者を共に異端として退けるという自己正当化の戦略的手法である。すなわち、自らとは異なる二つの陣営をいずれも極論として退けることで、自らの神学的主張のみがバランスの取れた正統派に他ならないことを印象づけようとする弁証法的構造を有した修辭的技法である。

グリルマイヤーの以上のネストリオス派の異端排斥研究に際して用いられた修辭的戦略技法における3類型は、あきらかにハーバーマス理論によるイデオロギー批判的研究方法やその基礎となった「言語、労働、相互行為」、さらには「認識に先立つ利害関心」といった基本概念から導き出されたものであることは間違いない。しかしながら、果たしてグリルマイヤーが導き出し、ネストリオス派排斥のメカニズム解明に際して用いられたこれらの修辭的戦略技法における類型論は、他のあらゆる異端排斥の研究に際しても適切に妥当し機能しうる類型論であると言えるのであろうか。また、グリルマイヤーが3類型を導出するに際して基礎的前提としたハーバーマス理論やそれに先立つガーター理論は本当に教会教理史研究に際して、いついかなる対象に対しても有効な方法論とみなして良いのであろうか？

## 第2節 解釈学的・イデオロギー批判的方法論の問題点

確かに、19世紀以来の伝統的歴史学研究の実証主義に批判的に対峙する形で、ガーターが解釈学的方法論を新たに打ち立てた意義は極めて大きい。すなわち、歴史学研究を筆頭に人文科学や社会科学は、主体と客体とが完全に分離していなければ成り立たない自然科学とは決定的に異なり、観察・分析を行う主体もまた歴史的存在として歴史的「地平」の延長線上に存在するという歴史ないし歴史観が有する独特の主客融合関係を前提とする。したがって、そもそも主体と客体とがつながった状態にある者同士の認識構造は、当然のことながら自然科学におけるように観察者と対象物との明確な分離によって成り立つものではあり得ない。20世紀の歴史学研究はこうして解釈学というそれまでの実証主義では見向きもされなかった新たな次元を取り込み、もはや現在では、この解釈学的認識構造や認識理論なくして歴史学・人文科学・社会科学は存在し得ないとさえ言い切っても良いであろう。

しかしながら、ガーターの解釈学的・作用効果史的方法論の弱点は、その『真理と方法』という三部構造の主著全体で提示された方法論が、いわゆる相異なる二者間の「対話」のモデルに従った「言語」行為のみの分析・考察から組み立てられていたという点にある。しかも、ガーターの場合、この「対話」も「言語」も、相手に対する基本的な信頼関係が成り立っているという極めて性善説的人間観を前提の上に構成された諸概念である。

果たして、人文科学や社会科学の方法論は、ガーターが構築したある意味で一面的な「対話」、「言語」モデルで全てを網羅できるのか。ガーターは実証主義の主客分離を批判すべく新たな解釈学のモデルを提起したが、この弱点があるがゆえに、彼もまた、結局のところ実証主義的

(positivistisch)な陥穽に落ち込んでしまっているのではないか。

このような批判的検証の上に、ガーダマー理論の弱点を補う形で、「言語、労働、相互行為」というさらに拡大された人的行為を基礎に据えて新たな社会科学の方法論を提起したのがハーバーマスであった。ガーダマーの解釈学がもたらした「言語」による「対話」関係をモデルとして構築された、ある意味ではナイーブでシンプルな人的行為に限定されて構築されていたのに対して、ハーバーマスは、このようなナイーブな解釈学では、「組織的に歪曲された言語コミュニケーション」といった「言語」によって為される悪意に基づく悪質な相互行為を批判的に検証し、その問題性を喝破することは不可能であると指摘したのである。さらにハーバーマスは、「言語」が取って組織的歪曲を隠蔽し、その問題性をあえて指摘しない時、いかに肯定的、前向きな言語表現であろうとも、その「言語」は間接的に組織的歪曲をもたらしているイデオロギーを結果的に肯定することに奉仕しかねない、と批判したのであった。ガーダマー理論が、結局は実証主義的 (positivistisch) 陥穽に再び陥っているのではないかとハーバーマスの指摘は、「言語」が「対話」において果たす役割や機能をガーダマーがあまりにも肯定的に捉え過ぎていたからに他ならなかった。

しかし、管見では、そのガーダマーの弱点を補うべく「言語」に加えて「労働と相互行為」をも基礎に据え、それによって「組織的歪曲」という「イデオロギーを批判的に検証する」ということが可能な分野にまで人的行為を拡大したハーバーマス理論も、ある局面において結局のところガーダマー理論が陥った陥穽を完全に脱却できてはいないと考えざるを得ない。それはすなわち、「組織的に歪曲された言語コミュニケーション」に対して「イデオロギー批判的」に対峙するという姿勢は、ある一定程度の領域・範囲においては有効であるとしても、果たして何をもって「組織的」とみなし、「歪曲である」と判断し、さらには批判している「イデオロギー」とは何であり、それに「批判的に」対峙するとはどのようなことであるのかについて、実は何も明確な絶対的基準など存在していないのである。

いかに「言語」が有する否定的側面を熟知していたとしても、一方が「個別的」だと主張するものが他方にとっては「組織的」だと主張の対象にもなり得る。一方が「歪曲である」と主張するものに対して他方がそれこそ「歪曲である」と返すならば、無限に「イデオロギー批判」は繰り返され継続し続けることとなる。

つまり、管見では、ハーバーマス理論の最大の弱点は、「組織的に歪曲された言語コミュニケーション」には「イデオロギー批判」的検証が有効であると言い切ったその時点で、相対峙し対立し合う双方のいずれかが「歪曲する側」であり、いずれかがそれを「批判」する側であるとの単純な「定式化」に陥ってしまい、その「固定された定式化」を現実の実態に当て嵌めることが「批判的検証」に他ならないと思込んでしまう点である。すなわち、ハーバーマスのイデオロギー批判的方法論は、ネストリオス派が如何にして排斥されたかといった排斥する側と排斥される側という一方向のみの排斥関係には妥当するかもしれないが、ひとたび相互に相手を排斥の対象とし、相互に相手のイデオロギー批判を繰り返し論じ合うという双方向の「対立」「衝突」、あるいは互いに「破壊」的で複雑な排斥関係が問題になると、いずれの側が「正統派」であり、いずれの側が「異端者」であるのかを定める絶対的基準など存在しないがゆえに、途端にこの方法論も恣意的な「定式化」の適用に墮してしまう危険性を孕んでいる。

ガーダマー理論の弱点を克服すべく持ち出されたハーバーマス理論も、この「定式化」を無条件に当て嵌めさえすれば事がすべて説明され、事態が解決するかに思い込まれてしまうという点で、結局のところガーダマー理論と同じ過ちの陥穽に落ち込んでしまっていると看做ざるを得ない。す

なわち、「定式化」をおこなう研究主体と、その「定式化」を一方的、無批判に当て嵌められる現実対象という二極化が避けられていない限りにおいて、ガーダマー理論が陥っていたある種の実証主義的 (positivistisch) な陥穽にハーバーマス自身も嵌まり込んでしまっていると言わざるを得ない。

### 第3節 相互影響・発達史的研究方法とは

ハーバーマス理論の問題点であり、なおかつ、ハーバーマスが批判的に克服しようと試みたガーダマー理論においても見落とされていた重要な観点は、たとえ肯定的な相互信頼関係によって「対話」が成り立っていなくとも、あるいは成り立たせようとさえしていなくとも、その両者はその「分裂」「分断」関係においてさえ互いに影響を及ぼし合い、それぞれが内的・外的変化を余儀なくされている可能性も十分にありうるという相互の「動的影響関係」が全く顧みられていない点である。つまり、管見では、対峙する両者が激しく激突し、衝突をさえ繰り返し、暴力さえもまかり通る激しい憎悪関係にあり、いかなる「対話」の可能性もあり得ないとさえ思われる状況であろうとも、その対立関係にある両者はむしろその対立によって互いに決定的な影響を及ぼし合っているのである。

管見では、互いに相手との抜き差しならぬ緊張関係に置かれているが故にこそ、それぞれが相手との関係において自らの思考や行動の変化を余儀なくされ、さらにはその自らの変化が対峙する相手に対しても変化を余儀なくするよう影響を及ぼしており、それが結果的に双方それぞれの変化としての何らかの「発達」を生んでいるというのが、対峙する両者間に生じている現実の姿に他ならない。ガーダマー理論も、その後続いたハーバーマス理論も、両者共に「対立・衝突」にさえも見られる「動的影響関係」には全く無関心で、むしろ両理論共に対峙する両者間の「静的固定的関係」を前提に据えた方法論に留まっていると評さざるを得ない。そのような評価を下さざるを得ないのは、どちらの理論で扱われる「対話」関係や「批判」関係も、極めて「静的・固定的」であり、「言語」による外的仕分けのみで事が全て解決可能であるとのある種の実証主義的 (positivistisch) 錯誤に陥ってしまい、暴力関係に潜む実はかなり根深い「動的依存関係」を決定的に見落としているからである。

つまり、本稿での詳述は避けるが、肯定的信頼関係に基づいた「対話」のモデルでは、当然の如くに両者の「信頼」という「依存関係」が前提になっているが、実は、本稿筆者の長年の洞察からすれば、信頼関係がもはや欠如した「対立」「衝突」あるいは「暴力的破壊」関係においてさえも、両者は実は、内的には相手を攻撃して破壊し尽くし、排斥、排除しなければ自らが納得できないという「動的依存関係」に陥っているのである。その意味で、管見では、両者は対立、衝突、暴力的破壊行為においてさえも、実は対峙している相手に深く「依存」しており、相手次第で自らは如何様にも変化をきたし、またその相手自体も、依存している他者の変化に応じて変化をきたすという事がありうるのである<sup>19)</sup>。

このように、本稿筆者は、ガーダマー理論やハーバーマス理論が陥っている「静的固定関係」の弱点を克服するためには、とりわけ建設的な「対話」のモデルに当て嵌まらないさまざまな「対立」「衝突」「暴力的破壊」関係という歴史的事象に対してさえも、「動的影響関係」、「動的依存関係」

19) 本稿での詳述は避けたが、対立、衝突といった暴力的破壊関係においても、実は暴力の対象とする相手に対して、強い依存意識や依存の深層心理が働いているとの理解から、精神分析学の領域において統合失調症患者の治療・治療に成功した画期的な研究が報告されている。山田信、「破壊の中の依存にふれること—万能的に支配する病理構造体の二つの側面と治療的接近」、『日本精神分析協会年報』第6号、(日本精神分析協会、2016年5月) pp. 99-110。「破壊」が「依存」と深く関わっているとの洞察については稿を改めて詳述したい。



が成り立っているという新たな認識に基づいた方法論や解釈技法の開発が必要不可欠であると思考するに至ったのである。そして、このような要請に応えられる新たな方法論とは、建設的な「対話」モデルが妥当する場合であれ、もはやそのモデルが妥当せず、対立、衝突、暴力的破壊関係に陥っているという破滅的な関係においてであっても、双方の間にはある種の「動的影響関係」や「動的依存関係」が存在しているとの重要な認識を踏まえた方法論であり、その「影響」、「依存」関係に着目した方法論こそが、今回、本稿筆者が新たにペラギウス研究に導入しようとして開発するに至った相互影響・発達史的研究方法に他ならない。

### 第三章 「ドナトゥス派論争」と「ペラギウス論争」間の相互影響・相互依存関係

従来の解釈学的方法論に基づく古代キリスト教史研究における問題点を踏まえ、本稿筆者は前章までに新たな相互影響・発達史的方法論の必要性を説いてきた。本章においては、実際にはどのような教会史的・教理史的課題に対してこの方法論が適応されるべきであるのか、具体的な事例に即して検証したい。その際、取り上げられるのはドナトゥス派論争とペラギウス論争という、従来の研究ではほとんど別個の問題として扱われてきた二つの論争間の相互影響・相互依存関係である。

#### 第1節 アウグスティヌスによる両派に共通する問題性の認識

アウグスティヌスがドナトゥス派との激しい議論の末、カルタゴ地方教会会議で勝利した経緯についてはここで繰り返すことを避けるが、ドナトゥス派論争とペラギウス派論争との繋がりを示す重要な証拠として、両派の類似性について指摘したのは、まさにアウグスティヌスその人であった。彼は、『ペラギウス派の訴訟議事について』の第12章27において、ペラギウスの教会論がドナトゥス派のそれと酷似しているとは指摘する。

「12.27. 異議が申し立てられたのは、ペラギウスが『地上の教会には染みも皺もない』と語ったことについてなのです。まさにこの点で、ドナティストたちは私たちと長い議論を戦わせたのでした。しかし、私たちは、脱穀場の床の喩えが示す、実の中に混ざった籾殻のように、善人たちの間に悪人たちが混ぜ合わせられていることを認めることが困難であった彼らを打倒したのでした。もしも、彼らが、私たちに教会は善人、つまり彼らが主張する、教会には染みも皺もあり得ないよう、まったく罪のない人々のみから成り立っているのだと考えるよう望まないのでしたら、このまさに同じ喩えによって、私たちはこれらの人々にも応えることができるでしょう。むしろ、もしそうなのでしたら、私はまさしく以前、私が言及していたあの言葉を繰り返します。真実な謙遜が彼らについて、次のように叫ぶ時、その教会のメンバーである彼らはいったいどのようなものでありうのでしょうか？ つまり、『私たちが自分たちには罪がないと語るのであれば、私たちは自分たちを欺いている。そして、真理は私たちの内にはない。』(1ヨハ1:8)あるいは、地上の教会には染みも皺もないのだとしたら、主が教会に『私たちの負い目をも赦したまえ』(マタ6:12)と教えたあの祈りを、その教会はいったいどのように祈るのでしょうか？ 最終的に、私たちは彼ら自身について、いったいあなた方は自分たちに罪があることを認めるのか認めないのかと彼らに問い質さなければなりません。もしも彼らが、自分たちには罪はないと答えるのであれば、私たちは彼らにあなた方は自分自身を欺いている、真理はあなた方のうちにはないと言わなければなりません。しかしもし彼らが、自分たちには罪があると認めるのであれば、それはまさに自分たちが染みであり皺であるということ以外の何を彼らは認めてい

るのでしょうか？ ですから、これらの人たちは、教会とは染みも黻もないがゆえに、他方、彼らは染みや黻であると言うのですから、教会のメンバーではないということになります<sup>20)</sup>。」

アウグスティヌスの論旨を明確にし、ペラギウス派とドナトゥス派とのどのような教会論を問題にしているのかを浮き彫りにするために、多少長めに文章を引用した。以上のアウグスティヌスの論旨からは、明らかに、両者が主張していた「地上の教会には染みも黻もない」との教会論が問題とされている。この主張が、脱穀場の床に散らばった稲穂の実と籾殻の喩えに当て嵌められ、さらに、教会が祈りとして唱えていた第1ヨハネの聖句や主の祈りの一節と対比されることで、「染みも黻もない」とのテーゼを主張していた両派の矛盾点がアウグスティヌス独特のロジックで浮き彫りにされている。両派の「地上の教会には染みも黻もない」との主張の背景や教会の実態の違いを知らないまま、アウグスティヌスのこのロジックのみを辿る限り、読者には、彼の論証が論理的に有効にして妥当な整合性をもって成立していると思われたとしても無理もないであろう。

また、アウグスティヌス自身も、このロジックの整合性を一たび構築し、これを不動の真理・真実であると信じている限り、まさしくペラギウス派は教会論において寸分違わぬほどドナトゥス派に酷似した異端的教会論を主張していたと確信していたことであろう。しかしながら、ドナトゥス派が「地上の教会には染みも黻もない」と主張した背後には、本来、キリスト教迫害期に迫害に耐えかねて棄教した *Traditores*（聖書を引き渡した者）と呼ばれた聖職者の問題や彼らによって執行された sacrament の有効性が妥当なのか否かといった問題が存在していた。他方、ペラギウス派にとっては、もはや迫害期の聖職者の棄教やその後の教会復帰による秘蹟の有効性などはほぼ全くと言って良いほど問題にはなっていなかった。ペラギウス派は、アウグスティヌスはおろか、いかなる教会指導者とも棄教や sacrament を巡る問題、さらには秘蹟の人効論か事効論かといった問題には全く関わっていなかったと言って良い。

むしろペラギウス派にとって最大の問題は、迫害期を経た後のローマ教会における状況、すなわち、キリスト教が公認された後にローマ教会内部に生じていた深刻な問題状況に他ならなかった。

「不幸な目にあっている人を抑圧したり、貧しい人たちに負い目を負わせたり、他人の財産をほしがったり、自分が金持ちになるためにある人々を貧しいものにしたたり、不正な収益をあげて喜んだり、他人の涙を食物にし、弱い人々を殺害することで自らを富ませ、その口がいつも嘘で汚され、その唇が卑猥で邪悪な言葉しか語らず、自分の持ち物を捧げるよう命ぜられているのに、逆に他人のものを掴み取る人々を、あなたはキリスト者と思いませんか？ このような人々が教会へ行き、そして浅はかにも、不当な搾取や罪のない人々の血で汚れたその不敬虔な手を差し出すのです<sup>21)</sup>。」

ペラギウス派が問題としたのは、迫害期を含むキリスト教公認以前には教会の外にあった弱者抑圧の不正・不義をもたらす社会的構造悪が、あろうことか教会内部に蔓延しているとの深刻な、モラルの欠如した状況に他ならなかった。ペラギウス派は、おもにローマのような都市部の教会内部で、以上のような自称「キリスト教徒」による弱者抑圧の実態を批判する目的で「地上の教会には染みも黻もない」との標語を用いたのである。明らかに、ドナトゥス派が問題とした聖職者による

20) Augustinus, *De gestis Pelagii.*, 12, 27 = (CSEL 42, pp. 49-122).

21) Pelagius, *Liber de vita christiana*, 11 = PL 40, 1041.

聖書の引き渡しをはじめとした棄教が引き金となった、聖職者が sacrament を執行する際の秘蹟の人効論か事効論かといった問題状況とは似て非なる次元の全く異なる問題状況において、上の標語が用いられたのであった。

アウグスティヌスがこのペラギウス派批判のロジックで用いた修辭的技法は、グリルマイヤーの3類型に当て嵌めれば、第2の「図式化」に相当することは明らかである。過去においてアウグスティヌスによって排斥へともたらされたドナトゥス派の主張内容とは、その背景や問題状況の次元が全く異なっていたにもかかわらず、同等のものに他ならないと一方的に判断され、既に排斥されたドナトゥス派の異端に等しい者たちとのレッテルをペラギウス派は張り付けられたのである。

## 第2節 ペラギウス派による厳格派への批判的見解

ペラギウス派が、「地上の教会には染みも皺もない」という標語を用いた背後にあった教会内部の状況は、キリスト教が公認された後に帝国の都市部で生じていた、「名ばかりのキリスト者」の増大と、迫害期には教会の外にあった社会的構造悪としての弱者抑圧が教会内部で、しかも「キリスト者」同志の間で罷り通っているという従来の教会にはあり得なかった否定的現実を前にしての標語に他ならなかった。ドナトゥス派による棄教した秘蹟執行者に対する厳格な倫理要求の問題や、その秘蹟の有効性に端を発する彼らの厳しい姿勢に関わる諸問題と、ペラギウス派が問題にした、かつては教会の外にあった弱者抑圧の構造悪が教会内部に入り込んできたために、まさに教会の中で弱者が抑圧され苦しんでいるという問題状況とは内容も次元も全く異なっている。似て非なる現実を前に語られた同じ標語から、アウグスティヌスは、両者が共に罪の赦しを認めず、自らが罪なき正しい者であるとの主張を繰り返す同様の過ちを犯した同じ異端者であるとの帰結に至るロジックを展開させた。

それでは、ペラギウス派は、アウグスティヌスが指摘するように、本当にドナトゥス派同様に、罪の赦しを認めない、倫理的に不寛容な厳しい姿勢を貫いていたのであろうか？ ペラギウスによるパウロ書簡註解を紐解くならば、少なくともペラギウス自身の自己理解では、当時、受洗後の如何なる罪の赦しも認められないことを主張して排斥されたノヴァティアン派への言及から、少なくともペラギウス派は彼らのような厳格主義を否定していたことは明らかである。さらに他方、教会における罪の赦しを悪用し、地獄の存在や永遠の裁きをも否定していた極端な寛容主義聖職者たちの立場でもないペラギウス自身が認識していたことも明らかである。

「悪魔は、極端な厳しさによって罪人たちが皆滅びるよう、絶望へと人々を貶めることによって欺くのです。同じやり方で、悪魔は、極端な罪の赦しによって彼らは悔い改める必要がないと主張することによって欺くのです。ソロモンは言っています。『右へも左へも偏ってはなりません。』ですから、パウロの書簡全体がノヴァティアン派に対する反論となっているのです。この箇所では、悪魔によって欺かれた者は、悔い改めを否定するということが最も明らかに示されているのです<sup>22)</sup>。」

ここで、例えば、ドナトゥス派同様に、受洗後に犯した罪は赦されないと主張していたノヴァティ

22) Pelagius, *Exp. 2 Cor 2: 11* (Souter, 241): "Similiter enim circumuenit per nimiam duritiam, ut peccatores pereant desperando, quomodo in nimia remissione minime corrigendo. unde Solomon ait: non declines dextra[m] neque [in] sinistra[m]. quamuis ergo tota epistula contra Nouatum sit, tamen hic euidentiissime ostenditur a diabolo circumuentus paenitentiam denegare."

アン派を、基準となる横軸の右端に位置づけるならば、極端な寛容主義によりいかなる罪も赦されると主張していた寛容主義聖職者は左端に位置づけられることとなる。また、ペラギウスがここで用いている、グリルマイヤーが指摘した類型は、第3の「修辭的弁証法」に相当し、極論としての両端に、それぞれノヴァティアン派と寛容主義聖職者を位置づけ、両極端とは異なる「正統派」の立場として自らをそのほぼ中央に位置づけていたことになる。

極めて興味深いことに、アウグスティヌスも同様に、同じ箴言4:27を引用しながら、極端な寛容主義聖職者を左の端に位置づけ、他方、ペラギウスをノヴァティアン派の代わりに右の端に位置づけている。

「善行を行うには自分の意志だけで十分であると語る者は誰でも、右へ傾いています。しかし他方、神の恵みが説き明かされるのを聞いて、『善をもたらすために、悪を為そうではないか』と語って善なる生活を捨て去ることが必要だと考える人たちは誰でも、左に偏っています。ですから、私はあなたに告げましょう。『右にも左にも偏ってはなりません。』すなわち、自分の自由意志を弁護するあまり、神の恵みなしに、あなたの善行をあなたの自由な意思に帰することがありませんように。また同様にあなたに告げましょう。恵みについて完全に安心し切って、神の恵みを弁護するあまり、悪行を愛するようなことはありませんように<sup>23)</sup>。」

アウグスティヌスのこの論駁的修辭技法も、ペラギウスの場合と同様に、グリルマイヤーの類型に従えば第3の「修辭的弁証法」に該当し、アウグスティヌスの場合には、両端の極論として相異なるペラギウス派と寛容主義聖職者とを位置づけることで、自らの立場をどちらでもない中間に位置する「正統派」とみなしていたことが明らかである。

ペラギウスもアウグスティヌスも、いずれも箴言4:27を引用していることから、両者の主張を次のように一つにまとめることができる。すなわち、ノヴァティアン派を右の端に位置づけ、極端な寛容主義聖職者を左に位置づけるとすれば、ペラギウスは両者の中間の右寄りに位置づけられ、アウグスティヌスは両者の中間の左寄りに位置づけられることとなる。そして、4つの立場のうち、より厳格な立場に位置づけられると見られるノヴァティアン派とペラギウス派の二派が異端として排斥されることとなったのである。

ノヴァティアン派もペラギウス派も、アウグスティヌスからはいずれも罪の赦しを否定し、自分たちは罪のない者であるとみなす厳格な立場に位置づけられるグループだと見られていた。こうして、極端な寛容主義聖職者とアウグスティヌスとは、教会内部の多数派として生き残ることとなったが、それは、双方が共に、教会とは、清い者と清くない者との混成共同体であると考えていたからであった。しかしながら、前二者の教会観が初代教会から迫害期にまで続いたより古い社会的少数派としての教会観であったのに対し、後二者は、キリスト教公認以降のより新たな状況を反映さ

23) Augustinus, *Ep.* 215.8; CSEL 57, 394-395: "Quicumque dicit: 'Voluntas mea mihi sufficit ad facienda opera bona', declinat in dextram. sed rursus illi, qui putant bonam uitam esse deserendam, quando audiunt sic dei gratiam praedicari, ut credatur et intellegatur uoluntates hominum ipsa ex malis bonas facere, ipsa etiam, quas fecerit, custodire, et propterea dicunt: Faciamus mala, ut ueniant bona, in sinistram declinant. ideo uobis dixi: 'Non declinetis in dextram neque in sinistram', hoc est nec sic defendatis liberum arbitrium, ut ei bona opera sine dei gratia tribuat, nec sic defendatis gratiam, ut quasi de illa securi mala opera diligatis, quod ipsa gratia dei auertat a uobis."



せた多数派となりうる教会観に他ならなかった。

### 第3節 ドナトゥス派説教集における聖書解釈とペラギウス派批判

以上の検証から、アウグスティヌスもペラギウス派も双方が、より厳格な倫理観を持っていたドナトゥス派やノヴァティアン派と、極端な寛容主義により悪を正当化する危険性のあった寛容主義聖職者とをそれぞれ両端に位置づけ、自らをその中間に措定することで自らの「正統性」を主張する修辭的論法（グリルマイヤーによる第3類型：修辭的弁証法）を用いていたことが明らかである。それでは、アウグスティヌス陣営によってペラギウス論争に先立って排斥され、アウグスティヌスから厳格主義であったと結論づけられたドナトゥス派は、ペラギウス派に対してどのような見解を有していたのであろうか？

ドナトゥス派がペラギウス派をどのように見ていたのかを示す一次史料は皆無であったが、前世紀末にオーストリア国立図書館に保管されていた一連の写本群が、間違いなくドナトゥス派司教による説教集であることが確実なものとなった<sup>24)</sup>。しかも、この写本群の説教集の中で、当該無名のドナトゥス派司教は、自らの特徴ある神学を展開させると共に、明らかに当時北アフリカにおいて知られるようになっていたペラギウスの弟子の一人、カエレスティウスの主張に言及していることも明らかとなった<sup>25)</sup>。

この『ウィーン説教集』（Ö. N. B. lat. 4147）としてオーストリア国立図書館に収められていた一連の説教のうち28編は、ヨアンネス・クリュソストモスの説教のラテン語訳であるとしてミーニュ版ラテン語教父文献全集の補遺（*Patrologia Latina Supplementum 4*）にも収められていたが、当該説教集は、フランソワ・ルロイによる精緻な研究の結果、他の擬アウグスティヌス説教や擬ヒエロニムス説教として伝えられてきたものも含めて、あるドナトゥス派司教による60編に及ぶ説教集であったことが確実なものとなった<sup>26)</sup>。きわめて興味深いことに、当該説教集で語られている聖書の登場人物への言及や信徒への勧告、人間論や神による救済の業などの聖書的・神学的内容において、ドナトゥス派の基本的見解がきわめて特徴的に顕になっているだけでなく、ペラギウス派が主張していた聖書的・神学的特徴に酷似した内容が随所に展開されていた<sup>27)</sup>。

そればかりでなく、特筆に値するのは、そのようなペラギウス派との類似性が疑いないものであるにも拘らず、当該ドナトゥス派司教が説教48の中で、「ペラギウス派の誤りに気をつけよ！」と述べて、聴衆に対して、神からの救済の恩寵の無償性を否定する見解に注意喚起する発言を行っていた点である<sup>28)</sup>。北アフリカでのペラギウス派の活動としては、410年のアラリックによるローマ侵略の難を逃れてカルタゴへと渡ったペラギウスとその弟子たちの内、ペラギウスとそのパトロンは間もなくパレスティナへと移動したが、ペラギウスの弟子の一人で最も急進的な見解を持って

24) Alden Bass, “An Example of Pelagian Exegesis in the Donatist Vienna Homilies (Ö. N. B. lat. 4147)”, *The Uniquely African Controversy, Studies on Donatist Christianity* (ed.) Anthony Dupont, Matthew Alan Gaumer, and Mathijs Lamberigts, (Leuven, Peeters Publishers, 2015), pp. 197–210.

25) *Sermon 48* (Quod oculus non vidit); François J. Leroy, ‘les 22 inédits de la catéchèse donatiste de Vienne: Une édition provisoire’, *RechAug* 31 (1999), pp. 201–204; Alden Bass, *ibid.*, p. 209.

26) François Leroy, ‘les 22 inédits de la catéchèse donatiste de Vienne: Une édition provisoire’, *RechAug* 31 (1999), pp. 149–234.

27) Alden Bass, *ibid.*, pp. 206–209.

28) François Leroy, *ibid.*, pp. 201; Alden Bass, *ibid.*, pp. 201–208; ‘Caue p e l a g i a n u m errorem!’ *Ibid.*, p. 209.

いたカエレスティウスらは北アフリカに残り、当地で宣教活動に従事していたことが明らかとなっている。そして、411年、いわゆるペラギウス論争が開始され、アウグスティヌスによる著名なペラギウス派論駁も繰り返された結果、418年のカルタゴ地方教会会議において、ペラギウス派の異端決議が承認されたのであった<sup>29)</sup>。

以上の歴史的経緯を踏まえて、前世紀末に新たに「発見」されたドナトゥス派司教による説教集の成立年代は、ペラギウス論争が開始されたと考えられている411年から北アフリカがヴァンダル族の侵攻を受けた429年までの間であろうと推察されている<sup>30)</sup>。ということは、既にドナトゥス派は411年のカルタゴ教会会議において異端決議がなされ、アウグスティヌスらを中心とした北アフリカのカトリック教会への併合・吸収が始まっていたにも拘らず、直ちにドナトゥス派教会が消滅したというわけではなく、しばらくの間、指導者を中心に教会勢力は維持され、同時に、411年以降にカエレスティウスらの活動によってペラギウス派への警告が説教中で言及されるほど北アフリカにおいて知られるようになっていたと推察される。

当該ドナトゥス派説教集の内容的特徴に関する詳細な検証と分析は稿を改めて行うが、特に強調されるべきペラギウス派との類似点は、旧約聖書におけるアダム、アブラハム、ヨセフ、ヨブ、ダビデ、その他の預言者たちの模範 (exemplum) が、エイレナイオスが示したような救済論の枠組みの中において、信徒が与るべき重要なモチーフとして強調されている点である<sup>31)</sup>。ペラギウス派文書に於けると同様に、当該ドナトゥス派説教集においても範例や模範が人類の救済において重要な機能を果たすと受け止められていたことは明らかである。さらに、その救済の業 (オイコノミア) への人間の参与に際して、個々人の自由意志の働きと功績 (meritum) とが力説されている点も、ペラギウス派が説いていた重要な信仰生活上の要件と重なり合っている<sup>32)</sup>。アダムの不従順の範例の拒否と並んで、キリストの模範への従順が期待され、その際の個々人の自由意志が強調されるという、いわゆるペラギウス派が当然のものとして信徒に説き明かしていた内容が、ドナトゥス派司教による説教集の中でも、当然のものとして繰り返され力説されているのである<sup>33)</sup>。

それにも拘らず、「ペラギウス派の誤りに注意せよ！」として人間の自由意志の過度の強調と、神からの恩寵の無償性を否定しかねない見解への警告が語られている点を、我々はどのように論理的整合性をもって解釈し整理することが可能となるであろうか？ もはや従来の解釈学的方法論が提示してきた単純な二項関係の「対話」のモデルでは説明がつかないばかりか、互いに酷似する内容を持つもの同士であっても、全く異なる「異端」の見解であるとして批判的に対峙「対立」しているという、きわめて複雑に入り組んだ状況に際しては、従来とは異なる方法論を新たに構築してそれを適用の上、当該両者の影響・依存関係を検証する他ないであろう。

#### 第4節 相互影響・発達史的研究方法適用の妥当性とその前提状況

前章に於いて、従来の解釈学的方法論を批判的に捉え直し、動的影響関係や動的依存関係を踏ま

29) 排斥までの経緯については、O. Wermelinger, *Rom und Pelagius, Die Theologische Position der Römischen Bischöfe im Pelagianischen Streit in den Jahren 410-432* (Stuttgart, Anton Hiersemann Verlag, 1975), pp. 134-282. 排斥文については、Denzinger/Schönmetzer, *Enchiridion Symbolorum*. 222-230, Freiburg im Breisgau 1965, pp. 84-85.

30) Alden Bass, *ibid.*, p. 200.

31) Alden Bass, *ibid.*, pp. 204-205; foot note, 41.

32) *Ibid.*, pp. 202.

33) *Ibid.*, pp. 205-208.

えた相互影響・発達史的方法論の導入が必要であることを明らかにした。この新たな方法論は、上述のドナトゥス派論争とペラギウス論争との関係を分析・検証する際に最も有効な方法論として機能する。なぜならば、解釈学的方法論に止まる限り、ガーダマー理論の場合には、双方の有効的「対話」が可能であることが暗黙の前提となっており、ハーバーマス理論においては、「対話」に上らないイデオロギー批判までが限界であり、しかも一方向のみの排斥関係には打倒するが、互いに他者をイデオロギーの担い手として批判・排斥し合うような双方向の対立関係を前提としておらず、更にはどちらの理論もドナトゥス派論争のような対立、衝突、暴力による破壊的分裂・分断関係を想定してはいなかったからである。しかも、いずれの理論も、結局は勝利した側の「正統性」と敗北した側の「異端性」とが結果的に自明のものとして前提されてしまい、予め自明の定式を当て嵌めるだけの自己満足に終始し、真の意味での双方の主張の妥当性と双方間の関係がなぜ破綻し、対立、衝突に至ったのかという真の理由は不明のままに留まってしまう危険性が高いからである。

ドナトゥス派論争では、ドナトゥス派教会勢力とアウグスティヌス陣営との激しい攻防の結果、皇帝の勅令導出や皇帝軍隊の出動要請に成功した後者が勝利し、前者が敗北した。しかし、「カトリック」としての普遍教会であるとの自己認識については、対立する両陣営が自らを「正統派」であると主張して、対立する相手を貶めようと相互にさまざまな画策を試みていた。いずれの側にも論争に勝利、あるいは敗北する可能性は対等に平等に存在していたはずである。その点は、後続するペラギウス論争の場合も同様である。

ドナトゥス派論争の末、彼らが「異端」とすると教会会議で決議されてしまった結果、その事実のみが一人歩きし始め、その後の歴史を顧みるならば、彼らの神学的特徴に類似するものは全て「異端」の嫌疑で覆われてしまった可能性が高い。ペラギウス派の場合も然りである<sup>34)</sup>。地方教会会議であれエキュメニカル公会議であれ、教会会議の決議は、一旦それが決議されてしまえば、その後の教会の分派活動や多様な勢力の自己認識や相互関係に絶大な影響を及ぼすものとなる。「異端」の神学的特徴ばかりでなく、「正統」派と決議された神学的特徴も、一たび決議されてしまえば、あたかも遙か以前からそれが正しい伝承であったかのように解釈され、その「正統的」見解のみがあらゆる思想内容を図る「絶対的基準」として機能し始めてしまう。

相互影響・発達史的方法論は、個々の歴史的な動的影響関係や動的依存関係を踏まえた上で、以上のような教会会議決議や「正統—異端」の「基準」と思われるものの全てを一旦は全て相対化しリセットすることで、勝者・敗者に拘らず、それぞれの教派、陣営の本来の意図や本来の歴史的現実の姿を抽出することが可能になると考えられる。また、そのような全面的相対化とリセットとを経た上で初めて、各教会会議における教理決議の意味や重要性も再評価することが可能となるであろう。

ドナトゥス派は、北アフリカを中心に初代教会以来の伝承をこの地域の人々の思考や生活習慣・文化的伝承なども取り込んだ形で400年以上の間継承し続けてきた<sup>35)</sup>。彼らは北アフリカの地で「正統に」キリスト教の伝承を継承してきたとの自己認識を形成していたのである。ペラギウス派も、

34) 16世紀宗教改革期における再洗礼派に対するマルチン・ルターからの「ペラギウス主義」との批判は、まさしくこの実例である。

35) ドナトゥス派の研究については、W. H. C. Frend, *The Donatist Church, A Movement of Protest in Roman North Africa*, (Oxford, Clarendon Press, 1952); W. H. C. Frend, *Martyrdom and Persecution in the Early Church, A Study of a Conflict from the Maccabees to Donatus*, (Oxford, Basil Blackwell, 1965) の大著をはじめ、Paola Marone, *Donatism*, Online Dynamic Bibliography, Sapienza Università di Roma, Update 2022, のデータベースに掲げられている多数の文献を参照。

とりわけ東方起源の神学的枠組みの特徴（テオーシス＝人間神化、アパセイア＝不受動心など）を取り込みながら、ドナトゥス派同様に初代教会以来の伝承を継承する「正統な」キリスト者集団であるとの自己認識を有していた<sup>36)</sup>。いずれの教派も、迫害期を生き延びてきた初代教会の伝承とその継承がきわめて重要な前提となっており、そこから彼らは自らにとって最も適した形でその霊的伝承を継承しようとしていたのである。

そこに、長く続いた迫害期の終焉と、キリスト教会が社会的少数派から多数派へと移行せざるを得ないという大きな社会変化が生じた<sup>37)</sup>。この大規模な社会変化は、初代教会以来の伝承を継承してきた教会に対して、諸伝承の抜本の見直しと、新たな教会制度の確立を余儀なくさせるという、従来の伝統的教会にとっては前代未聞の変化を突きつけられるほどの重要で大きな変化に他ならなかった。この歴史的变化が個々の教派に対して及ぼした影響には絶大なものがあつたと推察され、この変化が相互影響・発達史的方法論においても重要な影響要因の一つを形成する。

初代教会以来の伝承からドナトゥス派もペラギウス派も同様に大きな影響を被っていたことは明らかであり、同時に、それぞれの教派が、例えば先行するアリウス派やノヴァティアン派、マニ教やオリゲネス主義の排斥などに応じて、それらの異端の見解とは一線を画す自己表明を余儀なくされ、それぞれがこれらの先行する異端諸派とは異なる影響を取り込みながら自らの立場を変化させていったと考えられる。例えば、アウグスティヌス陣営がドナトゥス派やペラギウス派を異端陣営として敵視しながら自らの神学を発展させていったのと全く同様に、ペラギウス派は、思想史的状况の変化に応じて、アリウス派やノヴァティアン派とは自らの見解は異なったものであることを強調し、マニ教に反する立場を明確にすると共に、異端の嫌疑をかけられたオリゲネスに代わる東方教父としてバシレイオスやクリュソストモスの神学を取り込んでいったと考えられる<sup>38)</sup>。

ところが、4世紀に生じた教会の歴史的变化は、もはや初代教会の伝承を継承するだけでは対処できない新たな社会変化をもたらした。教会は、迫害に耐え抜く社会的少数派ではもはやなく、多数派としてあらゆる階層をも包含し、したがって社会的弱者のみならず社会的強者や社会的構造悪さえも取り込まざるを得ない多数派としての教会に生まれ変わる必要性に迫られた<sup>39)</sup>。この要請に応えることができたのが、アウグスティヌスの提唱した教会論であり原罪論や予定説をはじめとした新しいキリスト教的神人学に他ならなかった<sup>40)</sup>。

36) ペラギウス派の正統派への拘りについては、拙著、『キリストの模範』前掲書、第1章、第2章を参照。

37) この社会変化については、例えば、P. Brown, "Pelagius and his Supporters: Aims and Environment", in *id.*, *Religion and Society in the Age of Saint Augustine* (London 1972) 183-207, を参照。

38) ペラギウス派とバシレイオスとの繋がりについては、Nozomu Yamada, "The Influence of Chromatius and Rufinus of Aquileia on Pelagius - as seen in his Key Ascetic Concepts: exemplum Christi, sapientia and imperturbabilitas", *Studia Patristica*, Vol. 70, Leuven, Peeters Publishers, 2013, pp. 661-670; ペラギウス派とクリュソストモスとの関係については、Nozomu Yamada, "Pelagians', Chrysostom's and Augustine's Different Views on Pain of Childbirth as Revealed through their Counsel to Women", *Studia Patristica*, Vol. 128, Leuven, Peeters Publishers, 2021, pp. 295-307.

39) これについては、P. Brown, *ibid.*, pp. 197-207; さらに、W. H. C. Frend, "Augustine and State Authority, The Example of the Donatists", in: *Orthodoxy, Paganism and Dissent in the Early Christian Centuries*, (Hampshire, Ashgate Variorum, 2002), pp. 261-273.

40) とりわけこの点の指摘については、拙論、「ペラギウス派排斥のメカニズム—神学的言語行為の政治性」、『キリスト教史学』53号、(1999年) pp. 103-122; 同く拙論、「東方型修道制のローマ市移植における挫折要因」、『キリスト教修道制—周縁性と社会性の狭間で』, Sophia University Press, 2003/03, pp. 71-108, を参照。



アウグスティヌス陣営は、ローマ社会の新たな変化に際して多数派となりうる特徴を兼ね備えていたことが明らかである。しかし、当初からこれらの全てを備えていたわけではなく、例えば人間の自由意思については、初期のアウグスティヌスもむしろペラギウス派に近い自由意志理解を有していたが、それが諸派との論争を重ね、歴史的状況からの影響を受ける中で発達的に変化を遂げていったと考えられる<sup>41)</sup>。皇帝軍隊の出動要請についても、当初は教会への俗権介入には否定的な立場であったのが、次第にそれを肯定するようになり、ついにはマタイ福音書の一節「無理に引っ張ってでも彼らを連れてきなさい」を引用しながら、俗権介入を正当化するというように大きな変化を生ずるようになっていったのである<sup>42)</sup>。

第三章、第1節～第3節までのアウグスティヌス、ペラギウス派そしてドナトゥス派それぞれの自己認識と論敵批判は、さらに緻密で詳細な検証・分析を要するが、どの教派・陣営に於いても、少なくとも自分たちの立場は異端的極論などではなく、バランスの取れた「正統派」の立場に他ならないとの主張が展開されていたことは明らかである。管見では、4世紀の大きな歴史的な社会変化や、皇帝権力や教会会議の排斥決議など教会内外の圧力がなければ、ほとんどの教派・教会集団は、それぞれの地域や状況に根ざした形での彼ら自身にとっての「正統な」神学的・教会論的存在意義を有していたはずである。それが、歴史的にさまざまな変化や圧力、対抗勢力からの影響を相互に受けることによって、それぞれの神学的・教会論的思想内容にも変化が生じ、生じた変化がさらに互いに影響を及ぼし合い、それらの相互影響の積み重ねが、それぞれの立場の思想的発展をももたらすに至ったと考えられる。

このように、論争の当初から各々の教派やグループが既に後の持論を完成させていたというわけではなく、むしろさまざまな歴史的・社会的変化の影響や論敵たちからの影響をも被りつつ、度重なる対立・論争・衝突を経る中で個々の特徴的な思想が形を取るように動的に変化していったというのが実情であった。このような動的変化の容態は、従来の単純素朴で二項図式的な解釈学的方法論をもってしては、その「静的定式化」の特徴ゆえに結局は実証主義的陥穽に落ち込んでしまい、ことの実態を解明することは絶対に不可能である。このような複雑に入り組んだ相互の影響・依存関係の解明には、まさに、動的影響関係と動的依存関係を自明のものとして基礎に据えた相互影響・発達史的研究方法の適用こそが最も妥当な研究方法に他ならないと考えられる。

各地のいずれの教派、派閥勢力も、歴史的・社会的な大前提の大きな変化に曝されつつ、皇帝による勅令や教会会議の決議内容にも影響されながら、自らが「異端」勢力などではないことを示し続けることで生き延びようとさまざまな戦略的手法を講じ続けた。その複雑に入り組んだ相互の影響関係や依存関係を、より詳細な歴史的状況に即して、ドナトゥス派論争とペラギウス派論争という二つの論争間に於いていかなる教会派閥間の実態が存在したのかについて、また、なぜペラギウス派内部にオリゲネスらアレキサンドリア伝承の思想家からの影響のみならず、クリュストモスらアンティオケイア伝承からの影響、さらにはバシレイオスらカッパドキア教父からの影響など異なる派閥からの影響が混在して見られるのかについて、さらに精緻に検証・分析していくことが求められる。本稿では紙幅の都合により、新たな方法論の提起とその適用妥当性の検証、ならびに前提と

41) アウグスティヌスとその初期においては、人間の善性と自由意思による決定力を認めていたことについては、例えば、宮谷宣史、前掲書、p. 157。

42) これについては、例えば、宮谷宣史、前掲書、pp. 195-196; アウグスティヌスによる俗権介入の正当化については、Augustinus, *Epistola.*, 93 = NBA, 21, *Le Lettere I* (1-123), Roma, 1969, pp. 806-877。

なる歴史的課題の指摘のみしかできなかつたが、稿を改めて、両論争に対する相互影響・発達史的方法論の適用を本格的に試みたい。

## 結論

従来の解釈学的方法論では、ペラギウス論争やそれに先立つドナトゥス派論争との諸関係を検証・分析することは難しいとの認識から、本稿では、まず、第I章と第II章において、解釈学的方法論の問題点を明らかにし、その弱点を克服して両論争の正当な評価を行うためには、異なる論争間における異なる陣営の対立・衝突における動的影響関係や動的依存関係を踏まえた相互影響・発達史的方法論を導入することが最も妥当であるということを示した。また、相互影響・発達史的方法論とは如何なるものであるのか、その特徴を浮き彫りにした。

続く第III章では、従来、別個の論争として扱われてきたドナトゥス派論争とペラギウス論争との諸関係を解明すべく、まず、アウグスティヌスが両者の関係をどのように見ていたのか、ペラギウス派批判におけるドナトゥス派との共通批判点を指摘した。続いてペラギウスやペラギウス派は、ドナトゥス派のような厳格派に対してどのような見解を有していたのかについて、ドナトゥス派同様に受洗後の罪は赦されないと主張して排斥されたノヴァティアン派や、アウグスティヌスも同様に批判していた極端な寛容主義聖職者と自身との関係に言及する言説を指摘して、ペラギウス派とアウグスティヌス双方の「正統派」としての自己認識と対抗勢力への批判における自己正当化の手法を浮き彫りにした。最後に、ドナトゥス派がペラギウス派をどのように見ていたのかに関して、近年新たに「発見」されたドナトゥス派司教の説教集に現れるペラギウス派と酷似する聖書解釈の特徴を明確にすると共に、ペラギウス派に対する批判的言説をも指摘した。

こうしてドナトゥス派論争とペラギウス論争との関係に関わる諸言説を明確にすることにより、従来の解釈学的方法論では不十分で、それに代わる相互影響・発達史的方法論導入こそが最も妥当な方法論であることを検証した。

今後は、本稿で明らかにした相互影響・発達史的方法論を本格的に導入・適用することにより、ドナトゥス派論争とペラギウス論争との関係に関わる、さらに詳細で緻密な検証・分析を重ねると共に、オリゲネス論争やネストリオス派論争との諸関係においても同様の方法論を適用することで、ペラギウス論争全体の複雑で混み入った構造解明とペラギウス派排斥の実体解明に迫りたいと考えている。

## 文献目録

一次文献：

Augustinus, *Epstola*, 93 = NBA, 21, *Le Lettere* I (1-123), Roma, 1969, pp. 806-877.

——— *Epstola*. 215.8 = CSEL 57, 394-395.

——— *De gestis Pelagii*, 12, 27 = CSEL 42, pp. 49-122.

——— *Opus Imperfectum*, 3, 35 = CSEL 85/I, pp. 374-375.

Denzinger/Schönmetzer, *Enchiridion Symbolorum*. 222-230, Freiburg im Breisgau 1965.

Donatist, *Ö. N. B. lat. 4147* = *Patrologia Latina Supplementum* 4, 669-735 : François J. Leroy, 'les 22 inédits de la

- catéchèse donatiste de Vienne: Une édition provisoire', *RechAug.* 31 (1999), 0pp. 149–234.  
 Pelagius, *Expositiones in epistulas Pauli*; A. Souter (ed.), *Pelagius's Expositions of Thirteen Epistles of St. Paul* (Cambridge 1926).  
 ——— *Liber de vita christiana*, 11 = PL 40, 1041.

二次文献：

(邦語文献)

- ガダマー, ハンス＝ゲオルク, 轡田收 / 三浦國泰 / 卷田悦郎訳, 『真理と方法〈1〉—哲学的解釈学の要綱 (第2版)』, 叢書・ユニベルシタス, (法政大学出版局, 2012/11).  
 出村和彦, 『アウグスティヌス—「心」の哲学者』 (岩波書店, 2017年)  
 宮谷宣史, 『人類の知的遺産—アウグスティヌス』 (講談社, 1981年)  
 山田望, 『キリストの模範—ペラギウス神学における神の義とパイデアー』 (教文館, 1997年)  
 ——— 「ペラギウス派排斥のメカニズム—神学的言語行為の政治性」, 『キリスト教史学』 53号, (1999年) pp. 103–122.  
 ——— 「東方形修道制のローマ市移植における挫折要因」, 『キリスト教修道制—周縁性と社会性の狭間で』, Sophia University Press, 2003/03, pp. 71–108.

(欧文文献)

- Alden Bass, “An Example of Pelagian Exegesis in the Donatist Vienna Homilies (Ö. N. B. lat. 4147)”, *The Uniquely African Controversy, Studies on Donatist Christianity* (ed.) Anthony Dupont, Matthew Alan Gaumer, and Mathijs Lamberigts, Leuven, Peeters Publishers, 2015, pp. 197–210.  
 P. Brown, “Pelagius and his Supporters: Aims and Environment”, in id., *Religion and Society in the Age of Saint Augustine* (London 1972) 183–207.  
 W. H. C. Frend, *The Donatist Church, A Movement of Protest in Roman North Africa*, (Oxford, Clarendon Press, 1952).  
 ——— *Martyrdom and Persecution in the Early Church, A Study of a Conflict from the Maccabees to Donatus*, (Oxford, Basil Blackwell, 1965).  
 ——— “Augustine and State Authority, The Example of the Donatists”, in: *Orthodoxy, Paganism and Dissent in the Early Christian Centuries*, (Hampshire, Ashgate Variorum, 2002), pp. 261–273.  
 H. G. Gadamer, *Wahrheit und Methode; Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, (Tübingen, Mohr, 1965).  
 A. Grillmeier, *Mit ihm und in ihm. Christologische Forschungen und Perspektiven*, (Freiburg, Basel, Vienna, Herder, 1975), pp. 219–242, 554–581.  
 J. Habermas, *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, Frankfurt am Main, 1970,  
 ——— *Hermeneutik und Ideologiekritik*, ed. by J. Habermas, D. Heinrich, and J. Taubes, Frankfurt, 1975, pp. 120–159.  
 François J. Leroy, Vingt-Deux Homélie Africaines Nouvelles Attribuables à L'un des Anonymes du Chrysostome Latin (PLS 4) (Ö. N. B. lat. 4147), *RevBen.*, 104, (1994), pp 123–147.  
 ——— L'Homélie Donatiste Ignorée du Corpus Escorial (Chrysostomus Latinus, PLS IV, sermon 18), *RevBen.*, 107, (1997), pp 250–262.  
 ——— ‘les 22 inédits de la catéchèse donatiste de Vienne: Une édition provisoire’, *RechAug* 31 (1999), pp. 149–234.  
 Paola Marone, Donatism, Online Dynamic Bibliography, Sapienza Università di Roma, Update 2022.  
 Leopold von Ranke, *Zur Kritik neuerer Geschichtschreiber*, Leopold von rankes Sammtliche Werke, Bd 33–34, Verlag von Duncker und Humboldt Leipzig, 1874  
 O. Wermelinger, *Rom und Pelagius, Die Theologische Position der Römischen Bischöfe im Pelagianischen Streit in den Jahren 410–432* (Stuttgart, Anton Hiersemann Verlag, 1975), pp. 134–282.  
 Nozomu Yamada, “The Influence of Chromatius and Rufinus of Aquileia on Pelagius – as seen in his Key Ascetic

Concepts: exemplum Christi, sapientia and imperturbabilitas”, *Studia Patristica*, Vol. 70, Leuven, Peeters Publishers, 2013, pp. 661–670.

———— “What Is the Evil to Be Overcome? Differences between Augustine’s and Pelagius’ Views on Christ’s Life and Death”, *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, Vol. 11, Brill, 2015, pp. 160–180.

———— “Pelagius’ Narrative Techniques, their Rhetorical Influences and Negative Responses from Opponents Concerning the Acts of the Synod of Diospolis”, *Studia Patristica*, Vol. 98, Peeters Publishers, 2017, pp. 451–462.

———— “Rhetorical, Political, and Ecclesiastical Perspectives of Augustine’s and Julian of Eclanum’s Theological Response in the Pelagian Controversy”, *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, Vol. 14, Brill, 2018, pp. 161–193.

———— “Pelagius’ View of Ideal Christian Women in his Letters - Critical Perspectives of Recent Pelagian Studies Comparing Chrysostom’s View in his Letter to Olympias”, *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, Vol. 16, Brill, 2020, pp. 67–88.

———— “Pelagians’, Chrysostom’s and Augustine’s Different Views on Pain of Childbirth as Revealed through their Counsel to Women”, *Studia Patristica*, Vol. 128, Leuven, Peeters Publishers, 2021, pp. 295–307.

本稿は、日本学術振興会、科学研究費、基盤研究(C)(2022年度): JSPS (Japan Society for the Promotion of Science) ‘Kakenhi (Grant-in-Aid for Scientific Research (C)(2022) : 研究番号 [19K00125])’, 基盤研究(B)(2022年度): JSPS ‘Kakenhi (Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(2022): 研究番号 [20H01191])’, ならびに、南山大学パツヘ研究奨励金 (Nanzan University Pache Research Subsidy) I-A-2 (2022年度) の助成を受けた研究の一部である。